

連載

シリーズ・活躍する女性診断士たち

—「元国連職員!？」ママさん診断士は今日もゆく①

野田さえ子

愛知県支部 国際ビジネス研究会 代表

はじめまして。野田さえ子と申します。「元国連職員」という一風変わった肩書を持つ女性診断士といわれています。

さて、今月から4回にわたって、これまでの“破天荒”な人生を少し振り返り、(1) アフリカの中小企業まわりをした激動の国連勤務時代、(2) 迎えた人生最大の転機、(3) 帰国後の中小企業診断士資格取得物語、そして(4) 現在ママさん診断士として試行錯誤している現状について、お話したいと思います。

1. “史上初” 妊婦で赴任の国連職員

(1) ミャンマーからクライスラービルへ

2000 年末のこと。「開発学」という発展途上国の経済開発手法について学ぶ大学院のコースを終え、若手の国連職員候補を送り出す外務省のプログラムの一環で、国連機関への派遣が決まりました。

当初は、あのノーベル経済学賞をとったムハマド・ユヌス氏が発案した、低所得女性向けのマイクロクレジット（少額無担保保証）のプロジェクト管理官として携わりたいと考えていました。そこで、そうしたプロジェクトを実施している国連プロジェクトサービス機関（UNOPS）という組織のうち、ミャンマーにおけるプロジェクト現場に赴任する予定でした。

実際に赴任をするまでには、手続きなどの関係で1年以上もかかります。その間、暇だったわけでもないのですが、結婚することになりました。そうこうしているうちに、年が明け、なんと妊娠が発覚！ 人生設計なんて言葉、自分の辞書から

は、すっかり消え薄れておりました。

かといって、すでに予算は確保されており、何が何でも年度末には赴任しなければいけない状況でした。「すったもんだ」の挙げ句、UNOPS のニューヨーク本部が「ここなら出産も可能だろう」ということで、妊婦を引き取ってくれることになりました。

そんなこんなで、人生設計がまったく立たぬまま降り立ったのは、ブロードウェイミュージカルで有名な、あの「42nd street」。

都会の喧騒の中、見上げると空につき出ている尖塔が見えました。そうです、あの観光名所のクライスラービルの6階が職場となりました。

(2) オゾン層を破壊する物質をなくせ

着任した部署は、環境部モンリオール議定書班というところ。直属の上司は、パッと見てもわかるくらい“豪放”なハイチ系フランス人女性。同僚は、ドイツ、アメリカ、アゼルバイジャン人。上司の秘書が、なぜかコロンビア人（注：男性）。職務中にもラテン・ダンスを披露してくれる、またそれが許される、不思議な空間でした。

その部署のミッションは、1987年に採択されたモンリオール議定書に基づき、オゾン層を破壊する物質を、各途上国に指定されたスケジュールまでに代替ガスに置き換えていくというもの。とくに、クッション材やスプレー缶の製造にフロンガスが使用されており、これを代替ガスで製造できるよう、中小企業に対し技術および機械の転換を支援し、オゾン層破壊物質を削減させるというプロジェクトでした。

(3) Mission Impossible?

妊婦で赴任し、2ヵ月ほど導入研修を受けた後、産休に入りました。4ヵ月後に職場に復帰。さっそくプロジェクトに携わり、私が担当した地域は、ナイジェリアおよびアフリカの地域プロジェクトとなりました。

ナイジェリアという国は、石油資源も豊富で、人口も多く、ベッドや椅子などのクッション材として使用されるポリウレタンフォームの製造だけでも、2001年当時、4000トン以上ものオゾン破壊物質を排出していました。

私の使命はというと、2010年までにオゾン破壊物質をなくすために定められたナイジェリアの削減プランに従って、1年以内に318トンものオゾン破壊物質の排出を削減すること。



代替フロンでクーラーボックスを製造するナイジェリアの企業

ここで頭を抱えてしまいました。

ナイジェリアというところは、機材が税関に着いても書類がどこに行ったのかわからず、1年以上も停滞するのは日常茶飯事。

資金を企業に送ろうにも、民間銀行が信用されておらず、口座振り込みができません。このため、地方にある企業が資金をもらうためには、旧首都ラゴスにある国連開発計画（UNDP）の事務所が直に発行する小切手をもらわなければならなかったのです。遠い地方の企業は、年に何度も資金受け取りのため、飛行機を乗り継ぎ4～5日もかけて資金をもらう手続きを行わなければならない有り様でした。

しかも、対象となる中小企業は年間50社を超え、タイムリミットも厳しい状態。まさしく「ミッション・インポッシブル」の心境でした。

2. 奥が深いナイジェリアの中小企業

(1) 隅から隅まで工場めぐり

さて、プロジェクト実施には、対象となる中小企業を訪問しなければなりません。一口に、ナイジェリアの中小企業といっても、国土は東西南北にわたって非常に広いのが難点です。

まずは南西部にある旧首都のラゴスから入国。次に、中央部にある新首都のアブージャの町。ここは、石油資源の富の集積を表すような、ミラー張りの超高層ビルがまぶしい都市です。

ニジェール国境に近い北西部へ飛行機で飛ぶと、今度は、厳格なイスラムの衣装をまとい、砂埃のなかを人々が歩いている町ソコトに到着。町は一変して、イスラムのスルタンがいまでも顕在するという、荘厳な雰囲気になります。

そうかと思うと、南東部はクリスチャンの町。そして内陸の町は、クリスチャンとムスリムが人口的に拮抗しています。カデウナの町に私が訪問したときは、両信徒による暴動が起き、50名以上の死傷者を出した直後でした。たまたま町は静まり返っていましたが、企業の前には、ライフル銃を外に向けて私たちを睨みつけている警備員が2名いて、事件の物々しさを物語っていました。

(2) 女性にはトイレ休憩はありません

空路のない内陸の地域にある企業を訪問する際には、車で6時間ほど移動することも稀ではありません。

出張団のメンバーは、ナイジェリアにある環境を得意とするローカルコンサルタントと、技術知識を持つインターナショナルコンサルタント、そして、ナイジェリア政府のオゾン担当官でした。当然ながら、私以外、すべて男性です。

6時間の車の旅といっても、公共のトイレなどあるわけもなく、男性諸氏はそのまま車を止めて道端へ向かうのみ。私は、道端でトイレ休憩というわけにもいかず、これにはまいりました。

町を眺めてもレストランなどあるわけもなく、仕方がないので、喉が渴いても水を飲まないことにしました。かなりの乾燥地帯、しかもクーラーはなく砂ぼこりを巻き上げて炎天下を走りゆくのみ。その車の中で、「あと何時間」という言葉だけを繰り返していました。

やっとの思いで宿泊先にたどり着き、目の前にあった1リットルのオレンジジュースを一気に飲み干しました。すると、胃腸がびっくり仰天！ あわててトイレに駆け込みました。どうやらいきなり水分が入ったので、胃腸がうけつかなかったようです。

脱水症状一歩手前で、とても危険な旅でした。

(3) 身ぐるみ一つで企業訪問

メディグリという町に投宿して、そこから数時間のところにある企業を訪問した時のことです。「ここから先は、国境を越えて入ってくるゲリラが多い地帯なので、お財布はもちろん、カメラやメガネなどのあらゆる金品はホテルにすべて置いてほしい」とナイジェリア政府のオゾン担当官に言われました。

ホテルといっても地方都市にある民宿のような小さな宿で、セーフティーボックスなどはなく、財布やパスポートをそのままそこに置いておくしかありません。ここにむき出しで置いておくほうが安全なんだと、これから出かける先の危険度を妙に納得したものです。

いわれたとおり着の身着のまま、出発しました。1時間ほどすると、大きな銃をかかえて迷彩服を着た人がこちらに向かってやってきます。私たちは、緊張の面持ちで車を止めました。

ナイジェリア政府の担当官が話し始めましたが、どうやら途中から笑顔で話している様子。そのままオゾン担当官は迷彩服を着た人に1ドル札を渡して、無事通行が許可されました。

「ナイジェリアでは、警察や軍にある程度お支払いしなければ通行できないんだよ」と言われました。恐るべし、ナイジェリア……。

(4) 危険な町、オニーチャ

一番驚いたのは、オニーチャと呼ばれる町でした。ポリウレタンフォームの製造会社数社は町のある部分に固まっており、そこに車で向かいました。工場集積地かと思いきや、車は明らかに住宅街へ進みます。やがて、舗装されていない道路になって、どうやら目的地が近付いたらしいことがわかりました。しかし、その工場群が、民家が軒を連ねる住宅街の真ん中に集積していたのにはびっくりでした。

そもそも工業地帯と住宅街との地域区分もなかったのです。オゾン層破壊物質の代替ガスは人体への影響もあるため、工場内に排気施設をつけることが、従業員の安全上義務付けられていました。しかし、いくら工場外に排出したとしても、近隣が住宅街では「安全対策」の意味をまったくなさないことがはっきりとわかります。

さらに驚いたのは、零細企業では、ポリウレタンフォームをつくる際に、手で混ぜてつくっていたこと。従業員は目の前で危険部物質を直にかいでおり、「危険」の意識がまったく私たちとは異なっていました。

それだけにとどまりません。その住宅街の舗装されていない道を歩くと、道の真ん中に不燃物ゴミが山積みされ、そこからはもうもうと火がでているのです。明らかに有害なガスが発生していました。町全体が危険物質にさらされていることがこの町の日常なのだ痛感しました。

一人で驚いていると、一緒に同行した出張団のメンバーである技術コンサルタントが、私をこう慰めてくれました。

「今回はまだいいほうだよ。前回僕が来たときは、道の真ん中に死体が転がっていてね。あまりにも良心が痛んだから、その日の予定をキャンセルして、警察へ行ったんだ。せめてその遺体を何とか運ぶように、といたら、こちらがタクシー代を出してくれるなら移動してもよい、って警察にいわれちゃって……」。

終始無言のひと時を過ごしました。

(5) 318 トンを達成！

さて、そんなこんなで苦労を重ね1年が経過し、オゾン層を破壊する物質の削減量を報告する時期がやってきました。

いろいろありましたが、協力的なオゾン担当官のおかげで、無事指定された318トンの削減を奇跡的に達成することができました。その後も危険な出張を何度か経験しましたが、そこから無事生還できたのも奇跡だったかもしれません。

3. 女はつらいよ！

仕事も大変でしたが、私生活でも苦勞しました。着任後すぐに子どもを出産。しかし、夫はアフリカのセネガルに国際協力機構(JICA)の仕事で赴任

し、家族は離ればなれで暮らすことになりました。その後は、シングル・ワーキング・マザーとして1人格闘する日々が続きました。

(1) 行きはよいよい、帰りは怖い…

ニューヨークで通常業務を行う場合は、子どもを託児所に預け、何とかやっていたのですが、大変だったのは、出張でした。

さすがに2週間以上にもわたる出張時に、わが子を託児所に預けっぱなしというわけにもいきません。考えた末、出張の前に夫のいるセネガルにいったん立ち寄り、子どもを託してから、飛行機を乗り継いでナイジェリアでの業務をこなすことにしました。

帰りはナイジェリアからまたセネガルに立ち寄り、子どもを受け取って(?)、ニューヨークに帰るといふ強行スケジュール。

おまけにセネガルの旅行代理店はいい加減なものですから、航空会社が乗客数の2倍にあたる人数に発券をしてしまう始末。当日、飛行場ではその便に乗りこみたい人が狭い空港内におしよせ、大混乱。人々の怒号の中、数時間以上も足止めをくらいました。幸い、赤ちゃん連れだった私は、優先権をもらえ、予定通りその便に乗れましたが、子どももろともさすがに疲れ果てました。

(2) ズボラ主婦には罰金 50 ドル!

さて、やっとの思いでニューヨークに戻ってくると、家の前に何やら黄色い紙がおいてありました。みると、「お宅の家の敷地内にゴミが落ちており、町の美化に関する条例違反のため、50ドルの罰金を言い渡す」と書いてあります。

家の前をよく通る子どもたちがどうやらガムやアメを食べたクズを2~3落としていった様子。「これで50ドルの罰金?」とびっくりしました。

「異論がある場合は、警察署に出頭するように」とありましたので、これも何かの機会だと、反論するために指定された日時に警察に行きました。

「私は何を隠そう、シングル・ワーキング・マザーです。出張時には家を掃除する人がいないため、出張時にゴミを捨てられると困ってしまいます。今回警察が見回ったときにはたまたまゴミが落ちていましたが、普段はきちんと掃除をしてい

ます」と訴えました。

すると、ほどなくして、無罪放免の通知が届きました。あやうくズボラ主婦に対して罰金がくだるところでした。

(3) そして、救急車出勤……

子どもがそろそろ歩き出す、1歳になるかならないかのころ、事件はおきました。

家の玄関の前に7段ほどの階段があったのですが、カギをかけようとちょっと子どもから目を離れた隙に、わが子はベビーカーにぶらさがったままその階段の上からものすごい勢いでダイブ!私振り返った時には、顔面から落ち、額が地面に叩きつけられる鈍い音が響きわたっていました。

これには顔面蒼白……。あわてふためく私に驚いた近所の人が、「救急車を呼んであげようか」ときいてくれました。アメリカで救急車を呼ぶということは、少なくとも300ドルぐらいかかるといわれていましたが、そうこういってはられません。そのまま救急車に乗り込み、病院へ直行。

救急車が到着するころには警察もやってきて、事情聴取されました。アメリカでは子どもがケガをすると、まずは幼児虐待の疑いがないか調査されるのです。これにはまいりました。

幸い、子どものケガは大したことはなく、そのまま車で家路につきました。しかし、目の上に大きな紫色のこぶをつくった1歳の子どもを連れた母親に対して、すれ違う人のまなざしは厳しく、電車で揺られながら「このままでいいのだろうか」とぼんやりと考え始めました。

<つづく>

野田 さえ子

(のだ さえこ)

国際基督教大学卒、オランダ社会研究大学院大学
開発学修士。国連プロジェクトサービス機関環境
部担当官を経てセネガル在住。帰国後、2005年
(有)人の森設立。2007年、中小企業診断士登録。

現在、国際協力分野の研修講師として、また、外国人を雇用する
企業向けのコンサルティング・研修事業を行う「海外人財ネット」
代表として活動中。2児の母。

